

## 清澄寺大衆考

鹽田義遜

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 一、はしがき      | 八、圓智 觀智 實成    |
| 二、清澄の大衆     | 九、明心 圓頓 西堯 實智 |
| 三、淨顯義淨義一 慈義 | 一〇、伊勢公ノ御房     |
| 四、宗祖と淨顯義淨   | 一一、助ノ阿闍梨      |
| 五、淨圓房       | 一二、明 慧房       |
| 六、聖密房       | 一三、肥前公        |
| 七、道義房義尙     |               |

## 一

清澄寺大衆とは宗祖當年に於ける清澄寺の大衆の意である。これに先達て先づ師の房たる道善御房に就て述ぶべきであるが、これに就ては去月法華誌上に「舊師道善御房」と題して一文を草した故に、本稿は道善房以外の清澄の大衆に就て述べることにする。これを研究するに當つては、御遺文が根本史料であつて、次で遺文に就ての諸先師の末註等を参考して、これを彷彿乍ら取纏めて當年清澄に於ける聖人の四圍の環境を明にせんとするものである。

古來諸先師の研究中清澄の大衆を明かにしたものである。別頭統紀第三に當時に於ける同門の縑素とし、且つ清澄寺初轉法輪の折の對告衆として

道義房、淨顯房後歸三千高祖一義淨房、青蓮房、明心房、實成房、淨圓房後歸三千高祖一圓頓房、西堯房、圓密房、觀智房、實智房、圓智房後歸三千高祖一離僧稚兒之類咸出勞之（全、ハ）

と十三名列ね、又錄外考文五には「開宗之日在座之人」として、前掲の外に地頭景信を出し、更に圓智、道善房の略傳を掲げて居るが、要するに是等の中圓密を聖密の誤とすれば、青蓮を除いては遺文の中に散見する、清澄を中心とする人々を列舉して、且らく清澄の大衆とし、又聖人初轉法輪の對告に擬したものである。

今遺文中に散見する當時の清澄の大衆を列舉するならば、清澄寺大衆中に七名、御振舞鈔に五名、善無畏鈔に三名、報恩鈔、四信五品鈔に各二名、新尼鈔、光日房御書、聖密房御書、別當御房御返事に各一名を見るのであるが、此等中にも勿論重出もあるので、別人としては且らく十五名を算することが出来る、即ち左の如くである。

人名	書名	善無畏鈔	清澄寺大衆中	御振舞鈔	光日房御書	報恩鈔	四信五品鈔	聖密房御書	新尼鈔	別頭御房返事
道義房義尙		六五〇		一四一一						
淨顯房		六五二二三七〇								
義淨房		六五二二三七〇								

淨圓房	伊勢公御房	圓智房	觀智房	助阿闍梨	實城房	圓頓房	西堯房	實智房	明慧房	明心房	聖密房
一三七〇	一三七〇	一三七〇 一四一一	一三七〇	一三七四		一四一一	一四一一	一四一一			
									一四二四		
		一五〇〇 一五四三		一五〇〇						一五四三	
										一六五九	
				一九三〇							

續、九九

右の十五名が現に遺文に散見する所であるが、淨顯、義淨の如きは賜書もあり、且つ聖人と最も關係のあつた人々である。孰れにしても遺文中に於ける表示の多少は、順にまれ逆にまれ聖人との關係の親疎を物語るものである。

尙ほ此の外現存古文書中に、且らく三名を見出すことが出来る。即ち其一是身延文庫所藏の嘉暦三年正月の「日進聖人仰之趣」(棲神二一號所載)に、開宗當日の狀を述ぶる中に道善房は勿論、外に道義房、義一房、慈義房の三名が

見られ、又金澤文庫所藏の建長年間の寂澄手澤本の奥書に依れば、肥前公法鑑又は日乳が當時清澄の大衆であつたことが明かである。故に遺文散見の十五名に今の古文書の義一房、慈義房、肥前公の三名を加へて、且らく十八名を算することが出来る。以下是等諸人に就て述べることにする。

### 三

#### 淨顯房、義淨房、義一房、慈義房

清澄寺大衆中に於て宗祖と最も親しかつたのは、恐らく淨顯、義淨の二人であらう、大衆中に於て現に賜書の存するの聖密房以外には此の二人者のみである。又此の二人者は他の大衆とは異つて、その賜書の多い点からも、法門の内容からも早く聖化に歸し、隨つて親しい關係にあつたのである。今その賜書を出さば左の如くである。

佐 前	文永七	善無畏三藏鈔 <sub>七三</sub>	淨顯、義淨
	同 八	佐渡御勘氣鈔 <sub>七〇</sub>	同 同
佐 渡	同 一〇	義淨房御書 <sub>五九六</sub>	義淨
	建治二	清澄寺大衆中 <sub>七〇三</sub>	淨顯
佐 後	同	報 恩 鈔 <sub>五三四</sub>	淨顯、義淨
	同	同 送 狀 <sub>一一五</sub>	同 同
同	弘安元	華果成就鈔 <sub>三二七</sub>	同 同
	同	本尊問答鈔 <sub>九一七</sub>	淨顯

此の外二人者の名の出づるものは前表の如くである。

此二人は遺文中に於ては宗祖との關係は明瞭ではないが、恐らく二人共に健鈔(七、六四)のいふ如く、宗祖と共に道善房の弟子と見るべきであらう。且つ二人は共に稍先輩であり、古來よりの聖傳は等しく宗祖開宗の日の初轉法輪の折、地頭景信の難に宗祖を庇護して華房に免れしめたと傳へる。此のことは本尊問答鈔に

貴邊(淨顯)は地頭のいかりし時、義城房とともに清澄を出で、おはせし人なれば、何となくこれを法華經の御奉公と、おぼしめして生死を離れさせ給ふべし。二七

とあり、又報恩鈔に

日蓮が景信にあだまれて、清澄山を出でしに、追ひてしのび出でられしは、天下第一の法華經の奉公なり、後生は疑おぼすべからず。二五  
等とあるに依て古來よりしか解したのであらう。

併し乍ら身延文庫所藏古寫本、聖滅四十四年後の嘉曆三年戊辰正月一日の「日進聖人仰之趣」に依れば、身延第三世日進聖人仰として、開宗の日の有様が古老僧よりの聽聞として

一、日本國中の諸宗念佛、眞言、禪宗等皆無間亡國天魔と云々、其の時導善の御房を奉<sub>レ</sub>初數十人の人々赤面してをします。良あて導善御房聖人をつくくと御覽あて被<sub>レ</sub>仰けるは、道義御房の念佛し無間の業歟……其時導善御房は戸をたてゝ内へ入り玉ふ也、其後安房上總の念佛者と云百余人同心して、彌陀佛の敵よとて、夜打に寄て打殺しまいらせんと儀する處に、つねに聖人に付そいまいらせし、義一房、慈義房二人の御同宿此のよしを聖人に語り申也、其の故に夜打をのがれ玉ふ也、其の後東條左衛門に所をおはれ玉ふ也。

と記して居るが、此の記事が果して事實とすれば、開宗の説法に對する念佛者等の聖人夜打のことは數日後に屬し、又景信よりの擯出は更に其の後となるのである。

此の記事に依れば追放の事實は古傳と一致するが、唯時間の上に相違があり、又不時の難を免れしめたのは淨顯義淨でなく、義一・慈義の二人となるのである。今且らく開宗の日の折伏に對する、念佛者の難は義一・慈義の内報に依て免れたとしても、後の地頭景信の追放の時に、淨顯義淨が宗祖を慕つて清澄を出てたことは、本尊問答鈔並に報恩鈔の文意に依て明かである。故に日進聖人の仰を眞なりとすれば、初轉法輪の折伏に對しては、念佛者の難と地頭景信の難と二回の難があつたと見なければならぬ。今且らく斯く見るとすれば、最初念佛者の難の時は義一・慈義二人者の内報に依て難を免れ、次の景信の難の時宗祖追放の折は淨顯、義淨の二人も共に、且らく清澄を立ちのいたと解すべきであらう。

#### 四

更に宗祖と淨顯、義淨兩人との關係に就ては報恩鈔には

但し各々二人は日蓮が幼少の師匠にておはします、勤操僧正、行表僧正の傳教大師の御師たりしが、かへりて御弟

子とならせ給ひしがとし。二五

とあるに依れば、二人は道善御房の弟子であり、且つ宗祖より先輩で出家以來何かと指導せられたことが明かである。然るに傳教と勤操、行表との如く後には却て宗祖に歸し、同じく法華の行者の一分となつた様である。故に佐渡御流罪中にも常に文書を往復して、安否を氣遣はれたことは、佐渡御勘氣鈔、己心佛界鈔等に徴して明かである。

されば宗祖は常に二人者を通して、自己の主張を清澄の大衆に呼びかけ、且つ師の房を始め大衆の捨邪歸正を勤めて止まなかつたのである。又清澄寺大衆中に

去年不<sub>レ</sub>來如何、定めて子細有らん歟。<sup>一〇三</sup>

とあるは二人が時々身延の聖居を訪問されて教を受けたことが窺はれる。就中淨顯房が聖化に歸したことは、報恩鈔送狀に

無<sub>ニ</sub>親疎<sub>一</sub>法門を申すは心に入れぬ人にはいぬ事にて候ぞ、御心得候へ、御本尊圖して進らせ候。<sup>一二五</sup>

とあるに依て證することが出来る。何となれば最初の法門に對する誠に依ても明かであるが、本尊を授與せられたことに依ていよゝ明かである。これに就ては文永十二年の新尼御返事に依れば

但大尼御前御本尊の御事、おほせつかはされておもひわづらひ候、乃至領家はいつわりおろかにして、或時は信じ、或時はやぶる不定なりしが、日蓮御勘氣を蒙りし時、すでに法華經をすて給ひき、日蓮重恩の人なれば、扶けたてまつらなために、此の御本尊をわたし奉るならば、十羅刹定めて偏頗の法師とをぼしめされなん。尼御前我身のとがをばしらせ給はずして、うらませ給ふらん。<sup>九三〇</sup>

と示されし如く、重恩の大尼御前にさへ退轉の事ありし爲に、御本尊の授與はなかつたのである。此の点から見て二人者は不退轉の歸依者なることは知るべきである。

又淨顯房は建治二年道善房遷化の後には、その後を襲つて清澄寺の主座となつたことは、報恩鈔送狀に『御まへと義城房と二人此御房をよみてとして』と述べた宛名に清澄御房とあるはそれがためであらう。又義淨房には文永十年己心佛界鈔を賜ひ、壽量品の『一心欲見佛、不自惜身命』の文を引いて

日蓮が己心の佛界を此文にて顯すなり、其故は壽量品の事の一念三千の三大秘法を成就せること、此文に依て顯す也。<sup>五九六</sup>

と遺文中最初に三大秘法の名目を示し、不惜身命の信心を勧められて居る。若し弘安元年の華果成就鈔は、宗祖が一期弘通の功德を師の房に回向せられた、報恩鈔二卷の意を要約して述べたもので

稻は華果成就すれども必ず米の精大地にをさまる、故にひつぢ生ひいでゝ二度華果成就するなり、日蓮が法華經を弘むる功德は、必ず道善房の身に歸すべし。よき弟子をもつときんば師弟佛果にいたり、あしき弟子をたくはひぬれば、師弟地獄におつといへり。<sup>二七</sup>

と結び、師の房の回向に擬して二人者の信心を勸奨せられたのである。若し本尊問答鈔に至つては、曾て授與せられた本尊の疑問に對する説明書で、これ不空の觀智儀軌に出づる眞言の法華曼荼羅と我が大曼荼羅との相違を指示せられたものである。内容に就ては今の所論ではない。此の外二人者への善無畏鈔並に佐渡御勘氣鈔等は、道善御房攝化の法門であるが、一切は報恩鈔二卷に依て解決せられて居る、蓋し報恩の觀念は宗祖の道德觀の根本である。

若し佛祖統紀三には淨顯の諱日中（仲）と賜ひ（全書、<sup>八〇</sup>）又考文五に依れば淨顯は日專、義淨は日住（全書<sup>五四</sup>）と賜つたといひ、又一説には淨顯は聖人の肉兄といふが考異師のいへる如く信じ難い（全書<sup>三三</sup>）のである。孰れにもせよ二人者は宗祖と共に道善門下にあつて稍先輩であり、且つ法兄弟の關係にあつて宗祖の説に耳を傾け、相等信仰があつた人々である。若し最初清澄法難に於ける庇護に就ては、道一、慈義兩房の問題を留めて置く外はない。

## 五



## 淨圓房

淨顯、義淨以外の清澄の大衆の中で、賜書の存するは淨圓、聖密の二人である。淨圓房に就ては清澄寺大衆中に虚空藏菩薩の御恩をほうぜんがために、建長五年四月廿八日安房の國、東條の郷清澄寺道善之房持佛堂の南面にして、淨圓房と申す者並に少々の大衆に、これを申しはじめて其後二十余年が間退轉なく申す。<sup>七三</sup>

といふに見れば、淨圓房は正しく初轉法輪の對告衆であつたに相違ない。且つ開宗十年後の文永元年九月の當世念佛者無間地事の初に

安房國長狹郡東條花房郷、於<sup>ニ</sup>蓮華寺<sup>一</sup>對<sup>ニ</sup>千淨圓房<sup>一</sup>日蓮阿闍梨註<sup>レ</sup>之。<sup>五五〇</sup>

とある（今の文の東條は西條の誤、考異全<sup>三三</sup>）が、當時淨圓房は西條花房蓮華寺に住して、開宗以來宗祖の諸宗批判に對し疑問を懷いて居つた故に、念佛無間の所以を詳説したのが本書である。又淨圓房に對して宗祖が自ら阿闍梨と稱する点から見れば、淨圓房は後輩であつたからであらう。又當時蓮華寺は清澄の配下で、開宗後の難並に同年十一月十一日小松原の難を遁れたのも此處と傳へる。若し善無畏鈔に依ればその三日後、即ち十一月十四日道善御房と此に於て見參し、道善御房に心から捨邪歸正を勧めたのは此處である。即ち同鈔に

此諸經諸論諸宗の失を辨へることは虚空藏菩薩の御利生、道善御房の御恩なるべし。龜魚<sup>かめうし</sup>すら恩を報ずる事あり、何に況や人倫をや。此恩を報ぜんがために清澄山に於て佛法を弘め道善御房を導き奉んと欲す。而るに此人愚癡におはする上、念佛者也、三惡道を免るべしとも見えず、而も又日蓮が教訓を用ふべき人にあらず。然れども文永元年十一月十四日西條華房の僧坊にして見參せし時、彼人の云く我智慧なければ請用の望もなし、年老いていらへなければ、念佛の名僧をも不<sup>レ</sup>立、世間に弘まる事なれば、唯南無阿彌陀佛に申計也。<sup>九六</sup>

とはその折の宗祖の述懐である。後年報恩鈔執筆の動機は今の文中に躍如として拜することが出来る。

以上の事情を綜合して淨圓房は矢張道善房の弟子で、恐らくは文永頃から西條華房蓮華寺の寺主となつたのではないからうか、宗祖に對しては法兄の樣にも思はれる。然るに傳燈大師錄に依れば淨圓は俗名を太郎重政といひ、貫名重忠の長男で淨顯並に宗祖の舍兄に當り、法諱を日在と稱し、小湊の妙蓮寺の歷代と傳へるが、若し西蓮寺縁起なるものを信じ得るとすれば、強ちに推論ともいはれない。又佛祖統紀三は高祖に歸して諱を日在と賜ふ（全書<sup>八〇</sup>）と前説に依つて居るが、此等の説はどの程度に信じてよいか相等吟味する必要がある。若し姉崎博士は淨圓を法敵（法華經の行者日蓮<sup>五</sup>）と見て居るが、淨圓は宗祖と共に道善御房の弟子で、淨顯、義淨に對すれば目下と思はれるのである。

## 六

### 聖密房

次に聖密房であるが、建治三年聖密房へ遣はされたる賜書に依れば、専ら眞言の邪義を批判し、最後に

これは大事の法門なり、虚空藏菩薩に參じて、常に讀み奉らせ給ふべし。<sup>六一、六五</sup>

とあるに依れば、聖密房も矢張當時清澄の學僧であつたことは疑はれない。然るに健鈔には

此聖密坊と云は眞言宗にて、而も大聖へちなみ申たる様なる人歟云々（二五、八五）

といつて居るが、此の『因み申したる』の意味は、宗祖にたよつたといふ意味か何か不明である。又眞言宗といふことは法門の内容から來たものであるが、既に當時清澄が台密であり、且つこれを是正するのが宗祖の役目であり、本

書執筆の動機と見れば、密徒とは台密の意で東密とは解されぬ。されば巧異下には健鈔の説に依り、「密徒而陰慕<sub>ニ</sub>聖化<sub>一</sub>者歟」(全書<sub>五</sub>)といへる如く、當時清澄は慈覺大師を開山とする台密であり、且つ後世に至つては淨顯、義淨等の計らいで、毎年身延宗祖會下へ、幾人かの留學生を派したことは、清澄寺大衆中等の文意からして明かであり。今の書にも宛名に「聖密房遣<sub>レ</sub>之」とあるより見て、聖密房も或は留學生の一人であつた様である。

更に身延錄外に見ゆる別當御房御返事に依れば

聖密房のふみにくはしくかきて候なり、あひてきかせ給ひ候へ、なに事も二間清澄(一回御經は誤讀)の事をば、聖密房に申しあわせさせ給ふべく候か、世間の理をしりたる物に候へばかう申すに候、これへの別(所は誤)頭ななどの事は、ゆめゆめをもはず候。いくら程の事に候べき、但な(名)ばかりにてこそ候はめ、乃至大名を計るものは小耻にはぢすと申して、南無妙法蓮華經の七字をば日本國にひろめ、震且高麗までも及ぶべきよしの大願をはらみて、其願を満すべきしるしにや、大蒙古國の牒狀しきりにありて、此國の人ごとの大なる歎きとみへ候。日蓮又先よりこの事をかんがへたり、閻浮提第一の高名なり。先よりにくみぬるゆへにまゝこ(繼子)のかうみやう(功名)のやうに、専心と(に?)は用ひ候はねども、終に身のなげき極候時は、邊執のものどもも、一定と(た?)かへぬとみへて候。これ程の大事(蒙古襲來)をはらみて候ものゝ、少事をあながちに申候べきか、但し本寺(當時?)日蓮心ざす事は生處なり、日本國よりも大切にをもひ候、例せば漢王の沛郡ををもくをばしめしゝがごとしかれの生處なるゆへなり。聖智(?)が跡の主となるをもんてしろしめせ、日本國の山寺の主ともなるべし。日蓮は閻浮提第一の法華經の行者なり。天のあたへ給ふべきことわりなるべし。乃至これより後は心ぐるしくをばしめすべからず候 云々

乃時 別當御房御返事。(續九)

とあつて年號は不明であるが、文の内容より見て文永建治の交のものらしい。この二間寺といふのは二間川が清澄に流を發し、曲折南流して天津に至り、袋倉川と合して外洋に注ぐより見るに、或は今の天津若しくはその近邊にあつたのであらう。且つ此の清澄二間に就ては、建治二年の清澄寺大衆中に

東條左衛門景信が惡人として、清澄のかひしゝ等をかりとり、房々の法師等を念佛者の所從にしなんとせしに、日蓮敵をなして領家のかたうどとなり、清澄二間の二箇の寺、東條の方につくならば、日蓮法華經をすてんとせうじやう(請誡)の起請をかいて、日蓮が御本尊を手にゆいつけていのりて、一年が内に兩寺は東條が手をはなれ候しなり。虚空藏菩薩もいかでかすてさせ給ふべき。大衆も日蓮を心へずをものはれん人々は、天にすてられたてまつらざるべしや。七三

等とあるに依れば、建治二年以前に清澄二間の兩寺に關して東條と領家との勢力争があつた様である。然るに此寺が虚空藏菩薩の利生で領家に期したのである。

此に問題となるのは兩寺の別當であるが、兩寺が同一別當に管掌せられたか、各一人宛の別當があつたが不明であるが、報恩鈔送狀に依れば淨顯は建治二年七月清澄寺を管理した様であるから、今の別當御房御返事は或は淨顯房へ宛てたもので、二間寺の別當に宗祖を淨顯房が推薦したのかも知れぬ、これに對する返信が別當御房御返事である。即ち生國の寺の別當といへば、漢王が沛郡を非常に尊重する様に、進んで受くべきであるが、今自分は法華經の題目を日本國を始め、支那高麗迄も弘通すべき大願を立てたのである。天の御計らいで此の使命があるから、折角の御好意ではあるが『これへの別當なんどの事ゆめゝ思はず候』と辭退せられたのである。

又文の最初に『聖密房のふみにくはしくかきて候、よりあいてきかせ給へ』とあるのを、若し聖密房御書とすれば今の別當御房御返事は、建治三年の聖密房御書の後でなければならぬ。果してさうだとすれば、此の問題は道善房死後何人かに依て（淨顯等？）二間寺の別當に宗祖が擬せられたものといふべきである。何れにしても聖密房は清澄より當時身延への留學生の一人であつた様である。若し別頭統紀二四（全書下<sup>五三</sup>）、門葉縁起等には聖密房を以て、駿河の西山高橋入道なりといふが當らない様である。因に録内第百十七番目の聖密房御書は、第百四十七の斷片の重出なることは、愚案記（三、<sup>五三</sup>）の如くである。

## 七

## 道義房義尚

以下は全く賜書のない清澄の大衆であつて、遺文に依る外全く手掛はないのである。即ち種々御振舞鈔に依れば佗人はさて置きぬ。安房の東西の人々は此事を信すべき事なり。眼前の現證あり。い。の。も。りの圓頓房、清澄の西堯房、道義房、か。た。う。みの實智房等は、たうとかりし僧ぞかし。此等の臨終はいかんがありけん尋ぬべし。乃至日蓮こそ念佛者よりも、道義房と圓智房とは無間地獄の底におつべしと申したりしが、此人々の御臨終はよく候けるか。いかに、日蓮なくば此人々をば、佛になりぬらんとこそおぼすべけれ。<sup>二四</sup>

とあるに依れば、此等五人は粗ぼ同一地位の人々であり、且つ大衆中に於ても相等上位にあつたことは『たうとかりし』文で明である。而して此等五人は圓頓房を中心として、西堯房、道義房、實智房、或は圓頓房と次第すべきであらう。又是等の内今の文の外にその名の見ゆるは道義房と圓智房とである。

先づ道義房に就ては文永六年の善無畏鈔に依れば、道善房の事と叙して

此人の兄道義房義尙に此人向つて、無間地獄に墜すべき人と申してありしが、臨終思ふ様にもましまさおりけるやらん。〇六五

とあるに依れば、道義房とは道善房といふ如く、或は清澄塔中の坊名かも知れぬ。即ち清澄の岩村執事は曾で十二坊ありといひ、大衆中には『房々の法師等』二三とあるからである。或は通稱で字を義尙といつたのであらう。この道義房は熱心の念佛者であつたらうことは、左記の兩書共に無間地獄といひ、若し身延文庫の日進聖人仰之趣には良あて導善御房聖人をつくぐと御覽あて被し仰けるは、道義御房の念佛し無間の業歟。道義御房は清澄寺の近所也清澄寺は里より七里へたてぬる處也。寺へ登て四十年が間、一日に念佛一萬返、阿彌陀經百卷づゝ讀玉ふ也。此の人を生身の彌陀の如くに人貴みし也。

聖人仰云、道義御房は百卅六の地獄の中には無間地獄の底に落ち給ふべきなり、其故は一人勝て無間の業たる念佛被し申故也。

と御振舞鈔では清澄の人の様であるが、今の文に依れば清澄へ七里の所に居たとあるが、果して何處か不明である。併し乍ら善無畏鈔には明に『此一人の兄』とあるから道善の法兄なることは明である。(啓蒙、三〇五)然るに一説に清澄寺の僧、御文に兄とは肉兄なりや、法兄なりや詳ならず。(聖典大辭林二五)と述べて居るが恐らく肉兄ではなからう。併し宗祖の法伯父であつた様であるがその他は全く不明である。

## 八

## 圓智房、觀智房、實成房

若し圓智房に就ては、大衆中、御振舞鈔、報恩鈔、四信五品鈔等に見え、御振舞鈔に依れば

圓智房は清澄の大堂にして、三箇年が間一字三体の法華經をかきたてまつりて、十卷をそらにをぼへ、五十年が間一日一夜に二部つぎよまれしぞかし、かれをば皆人は佛になるべしと云々。<sup>二四</sup>

と圓智に就て述べて居るが、且く三の事實が觀取される。一に圓智は未だ聖化に歸せざるも、法華讀誦を日課とせること。二に五十年間二部宛の法華を讀誦せりといへば、御振舞鈔が建治二年作であるから、時に宗祖は五十歳、圓智房は七十歳以上の老齡なりしこと。三に右法華讀誦の日課は清澄山が台密を證し得ることである。

併し乍ら第一條に就ては、御振舞鈔に『道義房と圓智房とは無間地獄の底におつべし』<sup>二四</sup>とあり、又四信五品鈔には

明心と圓智とは現に白癩を得、乃至罰を以て惡を推するに、我門人等は福過十號疑無き者也。<sup>四三</sup>  
と無間、白癩の罰と記せるは、圓智は謗法者で終つたのであらう。併し乍ら相等學者で弟子に觀智房のあつたことは大衆中に

圓智房の御弟子に觀智房の持ちて候なる。宗要集かしたび候へ。そのみならず、ふみの候由も人々申し候し也。  
早々に返すべき由申させ給へ。<sup>四三</sup>

の文に依て知ることが出来る。又觀智房も圓智の弟子で建治二年頃或は身延に留學した清澄の青年僧の一人であつたといふ外知る由はない。併し乍ら遺文中常に圓智と引合に出さるは實成（城）房である。即ち報恩鈔には

提婆、曼伽利にことならぬ圓智、實成が上と下とに居ておどせしを、あながちにおそれて、いとをしとおもうとし

ころの弟子等をだにも、すてられし人なれば（道善）後生もいかんかと疑ふ。但一の冥加には景信と圓智、實城とがさきにゆきしこそ、一つのたすかりとはをもへども、彼等は法華經の十羅刹の、せめをかほりてはやく失せぬ。〇五と右の文に依れば圓智、實城は共に道善の法兄弟で、圓智、道善、實城と次第すべきであらう。且つ二人は常に道善房の歸正を防げたが、道善房以前に死去した様である。これを宗祖は謗法に依る早世と斷じられたのである。就中圓智は清澄寺大衆中、御振舞鈔、報恩鈔、四信五品鈔に都合四回謗法の代表として引合に出されたことは、清澄大衆中隨一の謗法者であつたと肯かれる。啓蒙所引の古鈔に

圓智か實成の二人の間に一人、聖人の虚空藏堂の前にて御說法ありしに、御顔をつくぐと見て、『誰かと思ひたれば藥王丸にてありけるよ』と蔑り奉りし事これありと申傳へたり。（一五、四九）とあるは、上掲諸文の意よりの想像であらうが、矢張謗法隨一の意が窺はれる。

## 九

### 明心房、圓頓房、西堯房、實智房

明心房は圓智と共に四信五品鈔に、謗法の罰に依て白癩に罹つたとあるが、若し同鈔の啓蒙には

明心等とは圓智は清澄の僧なる事、上にも見たり。明心、道阿彌事も定て清澄の者なるべし。更檢（二七、二六）と五品鈔に

明心與圓智現得白癩、道阿彌成無眼者。一四五

とあるに依て道阿彌を清澄大衆となすは不可である。今は謗法者の類を集めたので、清澄大衆を擧げたのではない。



御振舞鈔等は別である。いふ迄もなく道阿彌は法然の法孫道教の事で、思圓房叡尊の弘長中關東往還記には

新善光寺別頭、道教念佛者主領云々、對面の爲め近邊に寄宿し便宜を伺ふ云々。

とあり、又兵衛志殿御返事に『名越の一門の善光寺云々』(縮冊光作<sup>覺</sup>三九三)とあるは恐らくこれであつて、道教は當時然阿良忠と並び稱せられた、法然房の法孫なることは明である。随つて清澄の大衆と見るは誤である。

此の外御振舞鈔に依れば圓頓房、西堯房、實智房の三人も見えるが、是等三人は他所にその名も見えず、唯御振舞鈔に『いのもりの圓頓房』『清澄の西堯房』『かたうみの實智房』とあり共に『たうとかりし僧ぞかし』のみで、その他は全く不明である。唯圓頓房に就ては健鈔に

其の比井の林(森?)の圓佛(頓?)坊と申す人有り。是は大聖人の御童體の御時の後見也。(七、<sup>六五</sup>)

といふのは、報恩鈔に道善房に就て『圓智と實城とが上と下とに居ておとせし』といふに徴すれば、圓頓圓智が同系とすれば圓智は道善房の法兄又は目上に位する故に、宗祖幼時の後見ともいはれる。若し『いのもり』に就ては宗祖開宗の遺跡を遺文には『嵩か森』<sup>二五二</sup>といへば、山中の地名とも思はれるが、西堯房を清澄といへば恐らく、その附近の一地名と解する外ない若し西堯房は山中の一房主、又は清澄寺の役僧であり、道義房より上役又は法兄であらう。

更に『かたうみ』の實智房であるが、このかたうみに就ては、善無畏鈔には

日蓮は安房の國東條片海の、石中の賤民が子なり。<sup>〇六四</sup>

と遊され、又新尼御前御返事には

かたうみ、いちは、こみなとの磯のほとりにて、昔見しあまのりなり。<sup>八九〇</sup>

と遊ばされたに依れば、此の後の片海、市河、小湊の三地名であるか、これに依つて片海とは一方は海に面した漁村

の意と解すれば、海邊の市河小湊の意である。即ち市河は天津の東南に位し大村で、明應七年七月海嘯のために大半は海に没落し、後天保年中内浦と小浦を合して湊村といひ、小湊を以て『東條片海』といふより見れば、市河、小湊等東條一体が一方海に面した漁村であるより、東條一体を片海と呼んだのであらう。随つて實智房は天津邊に居つた清澄關係の人であつたらうが、その他に就ては全く明かでない。

## 十

### 伊勢公、御房

その他の諸僧に就ては清澄寺大衆中に依れば

抑も參詣を企て候はゞ、伊勢公の御房に十住心論、秘藏寶鑑、二教論等の眞言の疏を借用候へ、如是は眞言師蜂起の故に之を申す。又止觀の第一第二隨身候へ、東春輔正記などや候らん。圓智房の御弟子觀智房の持ちて候なる宗要集かしたび候へ、そのみならず文の候由も、人々申し候し也。早々に返すべきのよし申させ給へ。七〇三  
とあるが、本書は建治三年の正月十一日、佐渡公日向に托して清澄寺大衆に與へられたことは

このふみはさど（佐渡）殿と、すけ（助）のあざり御房と、虚空藏の御前にして、大衆ごとによみきかせ給へ。七〇四  
とあつて、當時眞言宗蜂起と聞いていよく佛法の邪正を糺すために、釋疏を集め法華の正法なる所以を力説し、清澄の大衆を引攝せんとせられたものである。今前引の文に就て次の三項が氣附かれる。

一、當時身延と清澄と常に往復ありしこと。

二、眞言破のため身延山に書物蒐集中なりしこと。

三、蒐集の書名に依て清澄の台密なることを證し得ること。

若し清澄寺に就ては、一昨年の本誌の清澄寺草創考に譲つて、此の中伊勢公の御房に就ては、健鈔には『伊勢公と云人も清澄の人』(二三、<sup>五三</sup>)とあるが、既に御房と敬稱あるに依て相等の地位の人と思はれる。又公の字を用ゐる点からすれば可成の長老であらう。

## 十一

### 助ノ阿闍梨

助の阿闍梨に就ては大衆中の末文にも見へし如く、佐渡殿と共に清澄寺大衆中の読み手とした点から見て、相等以前より宗祖に歸した人らしい。そのことは新尼御前御返事に、大尼御前に本尊を授與し能はさる所以を縷説して

尼御前我身のとがをしらせ給はずして、うらみさせ給はんずらん。此由をば委細に助の阿闍梨の文にかきて候ぞ、

召して尼御前の見参に入れさせ給ふべく候。<sup>九三</sup>

これに就て健鈔が『佐渡の助あざり御房』(二三、<sup>五四</sup>)と讀んだのは、佐渡公日向を逸したがためで、助の阿闍梨を佐渡の人としたのは誤である。随つて以下に

仰云、是は佐渡より助のあざりと云人を使として、安房國清澄寺へ遣はし玉ふ也。清澄寺は大聖の御そだちある處なれば、昔なれまいらせたる人々を教化有ん爲也。(三三、<sup>五二</sup>)

とあるはいよゝ誤であるが、それは古本が『佐渡助の阿闍梨云々』となつて居るに依て誤つたものである。されば

啓蒙には『健鈔義不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然歟』と述べ更に

平賀日意の首書には、此書は日向聖人へ賜り。清澄にて讀ましめ玉へり。御正筆は身延へ納めらるゝ也。佐渡阿闍梨を指せる旨著明なる歟。(三四、<sup>113</sup>)

とあるが、朝師本と平賀本には『さど殿とすけのあざり』とあるから明瞭である。若し進んで日向聖人と助阿闍梨との關係に就ては、一説に依れば

若しこれを日蓮聖人の直弟とすれば、佐渡公等の老僧に先んじて、阿闍梨號を有する程の人ならんには、宗紀に何等かの傳もあるべきになきところより見れば、清澄寺にして法臘高き人の日蓮聖人の弟子分として、弟子に準じて應分の御助力をなしたる人なりしならん。(聖典大辭林<sup>七〇</sup>)

と述べて居るが、宗祖の阿闍梨號を用ゐたるに就ては、勿論何等かの標準はあつたにしても、左程嚴密の意味でなく、時に依り、人に依て公といひ、殿と呼び、阿闍梨と稱したのである。故に辨殿日昭には殿と阿闍梨とを用ゐ、日向には公を用ゐた如く、就中拙寺珍藏の辨殿御消息の宛名には

辨殿、大進阿闍御房、三位殿。<sup>八六</sup>

とあり。又光日房御書には『三位房、佐渡公<sup>二四</sup>等あるに徴して明かである。即ち大進阿闍(梨)御房とあるも、大進は辨殿以上でなかつたのである。恐らくは當時眞言の灌頂を受けし人を、阿闍梨と稱した例に準じたかも知れぬ。

孰れにしても大尼御前に本尊授與せざる理由を、代辨せしめた点からして相等の學識あつた人であり、且つ日向聖人と同じく房總方面の出身で、大尼新尼等に有縁の人かと思はれる。

## 十二

## 明慧房

或説に依れば明慧房とは他師で、光日房御書等に出づとなし、

日本華嚴宗の碩徳、諱は高辨、乃至貞應元年正月十五日門下を誡め十九日寂す。壽六十、臘四十六、著作摧邪輪、摧邪輪莊嚴記等合して七十余卷あり。(聖典大辭林<sup>三〇</sup>)

と述べ、即ち華嚴高僧有名なる梅尾の明慧聖人を以て、光日鈔等に見ゆる明慧房として居るが、光日鈔には

念佛者と持齊と眞言師と一切南無妙法蓮華經と申さざらん者をば、いかに法華經をよむとも、法華經のかたきとしろしめすべし。かたきをしらぬはかたきにたばらかされ候ぞ、あはれあはれけさん(見參)に入りて、くはしく申し候はゞや。又これよりそれへわたり候三位房、佐渡公等にたびごとに、このふみをよませて、きこしめすべし。

又この御文をば明慧房にあづけさせ給ふべし。なにとなく我智慧たらぬ者が、或はをこつき、或は此文をさいかく(才覺)としてそしり候なり。或はよも此房は弘法大師にはまさらじ。よも慈覺大師にはこへじなど人くらべをし候ぞ。かく申す人をばもの知らぬ者とおぼすべし。<sup>二三四</sup>

とあるが、本文は舊録内二十三の七紙、阿彌陀堂法邸祈雨鈔の末文で、小川泰堂翁に依て日光鈔の斷片と確定(遺文二〇、<sup>八七</sup>)された分である。

右の文意から見れば明慧房とは、どう考へても梅尾の明慧上人ではない様である。若し啓蒙に依ればかく申人をば等とは、或は御房より下にかけて見るべし。初の二の或の字は明慧房に預けよましめ玉ふ、道理を宣

玉ふまでなるべし。(三〇<sub>左</sub>)

とある如く、明慧房に預ける根本の理由として『智慧たらぬ者』を出し、その者の所爲として

一、おこつき即ち嘲笑し

二、さいかくしてそしる

との二つの理由をつらね、更にそのおこつき、そしる内容を述べて『或はよも此御房は弘法大師にはまさらじ、慈覺大師にはこへじ』と、かやうにいふ人をもの知らぬものと思ふがよいと、斯様の有様であるから三位房、佐渡公に度々讀ますがよい、自分等が勝手に讀んで誤つてはならないから、明慧房に預けて置くがよいといふのである。

されば或説の如く明慧房は梅尾の明慧聖人でないことは明かである。萬一さうだとしても、宗祖御降誕の貞應元年に六十歳で寂した人に預けられ様筈がない。故にこれは、次の文に『弘法大師にはまさらじ、慈覺大師にはこえじ』とあるより、明慧房を單に明慧の字に依て明慧聖人と誤つたのであらう。故に今の明慧房とは房州方面に居つた宗祖の弟子で、或は宗祖の叔母といはるゝ、光日房と親しき關係にある人でゝもあらう。

### 十三

#### 肥前公

最後に肥前公であるが、これは前述の如く金澤文庫の寂澄手澤本の『マヅマヅマ口傳』並に『九字秘釋』の奥書に見ゆる所であるが、前者には

建長五年癸丑九月廿日午時書了、於打黒口筆師肥前公、雖無極惡筆爲佛法興隆法界衆生也。法鑣廿六才也。今寂澄

とあり、後者には

建長六年甲寅九月三日未時了、清澄山住人肥前公日乳生年廿七才、爲佛法興隆法界衆生成佛得道也。

とあるが、此の肥前公法鑣又は日乳とは果して何人なるやといふに、甲斐國小室妙法寺開山中老の肥前阿闍梨日傳が肥前公と呼ぶ様である。別頭統紀十一には多年宗祖の眞言亡國の批判を聞き、偶宗祖身延に退藏せるを聞き、これを毒せんとして果さず、ために弟子となるといひ。妙法寺縁起には宗祖入延後日朗日興同伴甲斐遊化の折、惠頂阿闍梨善智法師宗祖と角法して、大石を宙に上げしも下す能はずして弟子となると傳ふるが、統紀には乾元元年寂といひ、寺傳には六十七歳寂とあるから、恐らく乾元元年六十七歳寂と見られる。併し乍ら萬一善智法師が肥前阿闍梨と別人とすればいざ知らず、若し同人とすれば永仁六年の日興の本尊分興帳に

甲斐國大井入道殿孫肥前房者寂日房弟子也、仍日興申<sub>ニ</sub>與<sub>之</sub>、但今背了。(宗學全書、興門集。<sub>三一</sub>)

とあるが肥前公といふは古來小室邊一体大井庄といひ、地頭大井庄司入道も寂日房の弟子なる点から見て、小室の開山肥前房が或は建長五六年の交眞言研究のため清澄に遊學したとすれば、肥前房は恰かも宗祖開宗の頃清澄の大衆であつたことになる。若し此の推測にして誤なしとすれば建長五年の秋は法鑣といふ眞言師であつたが、翌年は早く宗祖に歸して日乳と稱したのではなからうか。若し果して然りとすれば日乳は、後甲斐に歸り故郷大井の庄に一眞言寺を創したが、文永十一年夏宗祖の身延入山を聞き、身延に宗祖を訪ひ弟子となつたのか、又は大井庄より六老の一人たる日興出でたる縁に依て、宗祖に歸し肥前公日傳と名を賜つたのではなからうか。これに就ては宗祖身延御入山後果して弘安元年の妙法尼御返事に

此深山に居住して門一町を出でず、既に五ヶ年に及べり。<sub>七九</sub>

とあり、又同四年の上野殿母尼御前御返事に

去文永十一年六月十七日、この山に入候て、今年十二月八日まで、此山を出づる事一步も候はず。ハニ

とある如く、一步も山をお出で遊ばされぬとすれば、入山當年の甲斐遊化に問題があり、小室山の縁起にも疑問があることになる。是等の点は更に充分の研究を要するが、肥前房が果して日傳なりとすれば、清澄以來の關係に一脈の自然性がある様に思はれる。

清澄の大衆は道善房並に宗祖を中心として、粗ぼ上述の十八名であるが、是等の中師弟關係の判然して居るのは、道善房と宗祖、圓智房と觀智房位で、淨顯、義淨も道善房の弟子と見て大過なからうが他は判然しない。法兄弟關係としては道義房、道善房、及び圓智房、道善房、實城房と義一房、慈義房等に就ては想像し得るが他は全く知る由もない。今從來の記述に依り且らく師弟、法兄弟等の關係を中心として、上述二十名の親疎の關係を圖表して見るならば次の別表の如くである

斯の如く清澄寺大衆考は、資料が乏しいので非常に研究が困難であり、隨つて正確なる斷案は下し得ぬが、宗祖と清澄大衆との關係が一分なりとも、明かにし得たとすれば幸甚である。本稿は棲神二十號の清澄寺創草考、並に法華二十四卷第七、八號の舊師道善御房と姉妹關係を有するものである。尙ほ攔筆に臨んで清澄山、金澤文庫、身延文庫には何等か文献上の關係のあることを感ずるものである。(昭和一二、九、二四)



